

# 「米寿記念 古谷蒼韻展」 に寄せて

本紙 9月1日号既報、全国4力所を巡回する「米寿記念 古谷蒼韻展」が作家の地元・京都で幕を開けた。同じ京都に暮らし親交のある2人の画家に展覧会を観覧しての感想をお寄せいただいた。なお京都展は終了（9月5日～17日・京都高島屋グランドホール）、今後の巡回予定は次の通り。

東京展＝10月3日(水)～16日(火)日本橋高島屋8階ホール、  
名古屋展＝10月20日(土)～28日(日)松坂屋美術館、福岡展＝  
2013年1月2日(水)～7日(月)大丸福岡天神店本館8階特設会場



「雲を詠む二首 山を詠む二首（萬葉歌・柿本人麿）」に見入る鑑賞者（京都展会場にて）

米寿記念、古谷蒼韻展が開会を得て、後二人になり何故か、速水御舟と村上華岳の話になり熱が入りました私は日本画をやっている関係で以前よりいつも話題になる事が多いが、書の古谷先生が私にぶつけてこられる質問の鋭さに十分に深くまで勉強して居ら

## 米寿記念 古谷蒼韻展を拝見して 中路融人

会を覗いている感じを超えたものを身体で感覚として、美しいもの、又、心境と言ったもので自分に迫って来る感動を覚えました。

思い起こせば七、八年程以前になるかと思いますが、古谷先生と酒席でご一緒する機会を得て、後二人になり何故か、速水御舟と村上華岳の話になり熱が入りました私は日本画をやっている関係で以前よりいつも話題になる事が多いが、書の古谷先生が私にぶつけてこられる質問の鋭さに十分に深くまで勉強して居ら

飛鳥の法隆寺の金堂の壁画に描かれている仏画の、鉄線と呼ばれる仏の顔を描く時に用いられる線がある。息を止めてしか引けないような線、優しい、ねばりのある線です。

古谷蒼韻展で展示されている良寛のやさしく弱そうに見えるが強い精神性を持つ線から、想像以上に自由で精神力の強い先生であるといまさらながら思ったのだ。毎日、毎朝、休むことなく書き続けられる草稿は、新しいイメージの泉なのでしょう。墨で色

## 古谷蒼韻・心境を凝視する墨線 小嶋悠司

と、村上華岳の菩薩の澄んだ線は時には華岳の心境の線ともなっている。古谷蒼韻の展示の中でも斎藤茂吉の詩の字の線には多くの草稿をくぐったの心境が移入されている。

古谷先生の展示の中でうれしかったのは、草稿を見出し出した時、制作の原動力を見たと思ったと同時に様々な墨表情

きな美の塊を、先生は毎日産み出しているのだと思えます。そして「本制作では無我で描き上げて、自分でふと感動する。」その様な状態になった作品は傑作と呼ばれる。草稿力でしょう。

古谷蒼韻の仕事は若い頃より一つの場所、同じ高さに留ま

（日本画家、創画会会員）